

本日は、西山和子の葬儀にご来席いただきありがとうございます。

西山家長男 紀男が喪主を務め葬儀を行ないます。

和子は、父 留太郎、母 キミ卫の長女として昭和 16 年（西暦 1941 年）

2 月 27 日、長崎県南松浦郡福江村（現在の 福江市）で生まれました。

父の転勤とともに大村市上小路（うわこうじ）に転居しました。

私が 4 歳の頃、祖母と共に諫早から母 キミ卫家族が住んでいる
大村に行きました。

その時、妹 和子に初めて会ったのを覚えています。

その頃、父は兵役に就いていて留守でした。

大都市の空襲が激しくなった時、祖父の計らいで、喜々津の久山に
母と 3 人の子供、紀男、和子、紘二、が疎開していました。

終戦までの短い間、母子初めて同じ屋根の下で暮らしました。

そこは、山、畑、小川のある戦争とは無縁のところ、叔母の子供
たち（女の子 3 人、男の子 1 人）が、近くの畑や小川に良く連れて
行ってくれました。

小川には石積みの堰があって川幅が広く、水は子供の膝くらいの深さ
でした。鮎のほか、ハヤが群れをなして泳いでいて、格好の遊び場と

なっていました。

中でも3女の方（のぶこさん）は和子に寄り添い、よく面倒をみてもらっていました。

終戦とともに諫早に戻り、祖父の別棟に転居、翌翌年、和子は北諫早小学校に入学しました。

中学生になった夏休みに長崎市に転居し、高校、短大へと進学。

昭和36年、県立長崎女子短期大学 家政科被服専攻を卒業しました。

和子は手先が器用で、婦人服の仕立てを楽しんでやっていました。

昭和42年、紀男と美年子の新婚の頃、北九州の小倉までやって来た後、妻の美年子にマタニティードレスを仕立て、プレゼントしてくれました。優しい妹でした。

その後、しばらくして精神病が発病し、父 留太郎の暴力から逃れるため入院させた、と母から聞きました。

しかし、何処に入院させたのか、両親は教えてくれませんでした。

2016年暮れ、敬子さん（円の妻）の決断により、子供たちを和子さんと面会

させたいとの提案を受けて、妹の辻恭子に入院先を尋ねました。

虹ヶ丘町の道ノ尾病院に入院している、今年は、2月に行ったきり和子には会っていない。自分は面会に付き添わないと告げました。

2017年1月、西山の家族、紀男、美年子、円、敬子、華世、知志、の家族揃って、初めて道ノ尾病院で和子と会うことができました。

以来、ソーシャルワーカーの仲介により、義姉 美年子からの音信を伝えることが出来るようになりました。

和子は、美年子からの手紙、写真、花などのプレゼントが届くと、その時は、嬉しそうにシャンと背中を伸ばす、何よりも人との交流を望んでいた、と聞きました。

2021年2月、精神病の症状が無くなった、との診断により普通病棟に移りました。

2022年8月、コロナビールスに罹患しましたが回復しました。

23年4月、誤嚥性肺炎のため、点滴と栄養剤の補給を続けて見事に回復し、食事が撮れるようになりました。

今年1月24日、コロナ禍の残る中、道ノ尾病院に和子を訪ねて面会しました。

車椅子で運ばれてきた和子に声をかけ、花束を渡すと、嬉しそうに目を輝かせましたが声を出してしゃべることは叶いませんでした。

今回、5月17日から点滴を受け、厳しい状況にある、との連絡を受けました。

20代から80代までの人生の大部分を閉鎖病棟で送りました。

一度も実家に戻ったことがなく、つらく悲しい思いを言葉に出すことができなくて、一人でじっと耐えていました。

母親が迎えに来てくれる日をどんなにか待っていたことでしょう。

まじめに一生懸命生きてきたので、旅立たれたら間違いなく浄土に迎えられることでしょう。

そこは、苦しみも悲しみも差別もなく、自由に歩いて、飛んだり跳ねたりできるところだ、と聞いています。

浄土から西山の家族を見守ってくださるようお願いします。

2022年8月、敬子さんが長延寺に法名をお願いしました。

法名「釋 縫和 信女」の和子に相應しい良い法名をいただきました。

なまんだぶ（南無阿弥陀仏）、なまんだぶ（南無阿弥陀仏）。

ご清聴、ありがとうございました。